チリ経済（コデルコ総裁の退任報道）

ケラー・コデルコ総裁の退任に関し，当地での報道ぶりをまとめたところ，概要以下のとおり。

１．テルセラ紙（6月7日付け）

「ケラー総裁の退任は企業統治への疑念をもたらす」と題し，関係者のコメント，消息筋からの情報を紹介している。

（１）今回の投票ではアルボルノス氏（新任役員），コントレーラス氏（新任役員），エスピノサ氏（組合代表），ゴンサレス氏（組合代表），トミック氏（政治評論家，元サンチャゴ地下鉄総裁），が退任への賛成票を投じ，リマ氏（元コデルコ総裁），ホフレ氏（前取締役会会長），ブッチ氏が反対票を投じた。現会長であるランドレッチェ氏は棄権した。

（２）関係者のコメントは次のとおりである。

（ア）ソルミニャック前鉱業大臣：「政権交代直後に重要な国営企業のトップを交代させるということは，法による企業統治の理念に反する」。

（イ）ワルド下院議員（UDI：鉱業委員会委員）：（「ケ」総裁の実績を評価しつつ）「彼が職務を継続しないということは，理解されないのではないか。大統領はコデルコ企業統治法への権限を悪用している。コデルコは国家の企業であり，その時の政権のものではない」。

（ウ）ヌニェス下院議員（RN）：「新多数派のパワーショベル（当館注：チリ軍政時に使用された，既存の体制を根こそぎ破壊するものへの比喩）がコデルコにも訪れたことは残念だ」。

（エ）プロクリカ上院議員（RN）：「ラ」取締役会会長及び「コ」取締役の役員適格性についての会計・行政監査院（Contraloria）での判断を待たずに，「ケ」総裁の進退が先に処理されてしまうことへの不快感を表明した。

（オ）ウィリアムス鉱業大臣：「新しい総裁の任命決定は取締役会が行うことであり，政府はその決定を尊重するだけである」。

（カ）アレナス財務大臣：「取締役会とその会長は政府の信任を得ている」。

（キ）レムス下院議員（PS）：（今回の決定が政治的な思惑によるものであることを否定し，コデルコ労働組合の意見が重要な要素になったと説明しつつ）「今回の決定は自主的なものである。また，政権が交代したら執行体制の評価を行うことは当然である。今回決定への反対意見こそが政治的な戦略である」。

（３）同紙では，消息筋からの今回決定の舞台裏として，「ラ」会長の棄権は政治的なものであるとして捉える必要があること，リマ取締役（当館注：与党DC党員でもある）の退任反対への投票は，政権内での今後の動きについて注視する必要があることなどを伝えている。

（４）「ケ」総裁の暫定的な後任候補としてはアリアガダ総務・財務担当副総裁が自然ではあるが，ペレス・デ・アルセ人事担当副社長も有力であるとしている。

（５）メンドーサ会計・行政監査院長は、近々「ラ」会長及び「コ」取締役の適格性について発表を行うとし，右2名が適格要件を満たしていない場合には，今回の「ケ」総裁に対する決定は引き続き検討に付されることになると説明した。

２．メルクリオ紙（6月7日付け）

「トミック取締役の投票がカギとなって「ケ」総裁の退任が決まった」として，退任劇の内幕を披露すると共に，後継総裁候補を紹介している。

（１）総裁の解任に当たっては9名の取締役のうち5名以上の賛成票が必要であるが，今回の動議では賛成4票，反対3票，棄権2票となっており，1度目の投票では結果が出なかった。「ラ」会長は後日の改めての投票を提案したが，これに対し当初の投票で棄権に回っていたトミック氏は，後日の投票ではかえってプロセスに疑念が生じるとして，解任に賛成する票を投じ，これが決定打となって今回の解任が成立したとしている。

（２）「ケ」現総裁の任期は6月13日までとなっており，暫定的な後任は「ア」副総裁など，現副総裁の中から選任され，正式な後任総裁が選出されるまでには数ヶ月かかる見通しとのこと。後継者候補として取りざたされているのは元コデルコ副総裁でトミック取締役の兄弟でもあるフランシスコ・トミック氏，現ルミナコパー社長であるネルソン・ピサロ氏（当館注：ルミナコパー社はカセロネス鉱山の開発・運営企業），元コデルコ・ノルテ社副社長であったセルヒオ・ハルパ氏，エスペランサ鉱山支配人であるアンドレ・ソウガレット氏，テニエンテ鉱山総支配人であるアルバロ・アリアガ氏，そしてコデルコ技術開発責任者のフィデル・バエス氏である。

（３）なお同日付の同紙別項では前取締役会会長であったホフレ取締役のインタビューを以下のとおり掲載している。

（ア）「ケ」総裁はコデルコの生産性改善，費用抑制，保安改善など多くの分野での業績があり，自分（「ホ」取締役）は解任には反対した。後任となる総裁候補については，まだ明確な候補はおらず，今後探す必要がある。その観点からも現在の取締役会会長，取締役会の態度を注視している。我々がなすべき事は選任のプロセスを政治化させないことである。

（イ）今回の取締役会では，政治面及び組合活動面での利害関係者によって複雑な雰囲気が醸成されており，その中では「ケ」総裁が職務をこれ以上続けていける雰囲気では無かった。もしもあのような雰囲気の中でも，「ケ」総裁が職務を続けるという結論がもたらされていれば，国家に対する良いシグナルとなったであろうが，それはかなわかった。もちろん今回の決定に当たって，「ケ」総裁のインタビューは大きく影響しただろう。多くの点において彼と取締役会との考えに乖離が見えたのだから。

（ウ）今後の取締役会については，協調できる環境を整えるために努力していくこととなった。実現のためには多くの要素があるが，取締役会の中ではすでに個人的な信頼関係における前進が見られている。個々の取締役間の信頼を育むために新会長の努力は適切であったことを強調したい。（了）